



『ドイツ国制論』の提出する「ドイツ帝国」改革構想とは如何なるものであったか。抑々、ヘーゲルが『ドイツ国制論』で対決しようとしているドイツの政治的現実とは、宗教分裂に其の有力な源をもち三十年戦争によって政治体制として現実化され固定化された、ドイツの「没国家性」に他ならない。「ドイツは最早国家ではない。」今、その歴史的経緯に就いてのヘーゲルの理解を不問に付すとすれば、問題は、彼が斯様な政治的現実を如何なる理念に基づいて克服しようとしているか、更には、その為の手懸りを何処に見出しているか、である。そして、その考察に際して忘れてならないのは、ヘーゲルが帝国と云う政治的枠組みを放棄していない、と云う点である。彼は帝国の政治的可能性を信じている。その意味で彼の国家構想は改革を志向するものであっても革命を志向するものではない。

ヘーゲルの帝国改革構想の根幹は、一般的な政治学の用語で表現すれば、代議制に基づく君主政の実現に在る。併し、その内実は、ドイツ独特の国制に即して理解されねばならない。即ち、代議制の許で彼が理解しているのは、伝統的な帝国議会であり、君主とは、従って、帝国皇帝である。そして、彼の改革のポイントは、結局の処、皇帝を最高指揮官とする統一的帝国軍の編成と、其を財政的に支える為の帝国議会の改革とに尽きる。決して其以上でも其以下でもない。詳細の紹介は控えるが、その要諦は、以下の二点である。即ち、先ず、従来の帝国議会に於ける領邦の議席が、経済的負担能力に応じて配分されたものではなかった点を改善する。次に、軍事費の支出を巡る審議を帝国議会の場で一元的に行なえるようにする。此等が他の先進的近代国家に於ては疾うに実現された事柄であることに贅言は不要。この意味で彼の改革構想の内実が意外に貧弱なものである事に

我々は驚かされる。彼の要求が統一的な軍隊の確立と云うに過ぎないからである。この点は、一方で、ドイツの政治的状況の深刻さの反映とも理解し得るが、他方で、ヘーゲルにとって積極的な意味をもつ事柄でもある。何故なら、それは、彼の団体主義的な国家理解からの必然的帰結でもあるからである。併し、この点は、此処では詳論し得ない。

ヘーゲルは自分の改革構想実現の手懸りを何処に見出したか。この点の考察は、彼の構想の背後に在る思想の所在を我々に知らしめる極めて興味深い符合に我々を導く。先ず、彼は、「ドイツ帝国」に、自分の提出した改革構想を現実化する能力が欠落している、と看做す。併し、この認識は、彼にとって、自らの構想の無意味性を帰結しない。何故なら、彼には、「或る征服者の権力」による強制が、ドイツ人をして、彼の構想に対する必要性を認識せしむるであろう、と云う確信或は期待があったからである。「或る征服者」とは、オーストリアのカール大公を指す。代々に互り神聖ローマ帝国皇帝を輩出してきたオーストリア王国による支配に、ヘーゲルはドイツ再生の期待を繋ぐ。この時、興味深い事に、彼は自らの期待をテセウスの神話に重ね合わせる。この事実は、彼が『ドイツ国制論』に於てマキアヴェッリの『君主論』（仏訳）を大いなる共感を以って引用していると云う事実、及び、『君主論』第26節に於てマキアヴェッリがイタリアの政治的分裂の現実を前にしてテセウスを引き合いに出している事実を顧みる時、非常に重要な意味をもってくる。即ち、カール大公をテセウスに重ね合わせる時、ヘーゲルは、実は其の背後で同時に、自分を『君主論』のマキアヴェッリに重ね合わせてもいる事が判明するのである。そして、マキアヴェッリに対するヘーゲルの斯様な共感のもつ思想的意味は極めて大きい。何故なら、其処には、国家に於て権力のもつ根本的意義に対する認識が、従って、革命に触発された嘗ての共和主義的国家理想の死が、含意されているからである。

はやせ あきら（助教授・ドイツ哲学）